

# パキスタン・事始め

7.23 ~ 8.13

手塚 紀恵子

今年の夏休みは、パキスタンで過ごしてきました。トラブルだらけのトラベルで、決して満足のいく旅ではなかったけれども、パキスタンという国との出会いは衝撃的で、あのひたすらに荒々しく崇高な山々に囲まれて過ごした日々は忘れ難く、また近年中には是非訪れてみたいものだ、と思っております。

目的地は、かの有名なナンガ・パルバットの南壁(世界最大の比高4500mを誇り、ルパール・フェイスと称する)のB.C.。パキスタンでは、標高の低い所は、ゴラゴラの太陽に岩屑山ばかり、緑を見る事も稀なだけけれども、標高が高くなると降雪の恩恵に浴する事ができるんでしょね、水と緑に恵まれて、標高3500mのB.C.あたりは、清冽な流れに、柳・モミなどの木々、エーデルワイスをはじめ様々の花々に彩られた草原になっており、放牧の山羊、馬、ロバなんかが行き交う、メルヘンの世界。なかなかのむんでした。そして、ここら辺の山々は、ネパールの山々と比べるとかなり厳しいようで、本当にナンガばかりじゃなくって、どの山も、シャープな岩峰群が懸垂氷河やアイス・フォールで武装しており、どっから登るの?、と感じで、山を見上げてはただただ啞然としておりました。

私達のパーティは、B.C.からナンガとは谷を隔てて向かい合っているルパールピーク(5595m)と称する山に登る予定だったけれども、悲しいかな到達高度は4600m余、雪線の高いここいらの山では、ほとんど裾野の徘徊だけに終わってしまいました。登れなかった理由は、一応病人が出たから、という事にはなっていますが、私自身は、もしアタックのチャンスが与えられたとしても、あの山は登れなかったんじゃないだろうか、と思っております。

今回の旅は、某旅行社の<sup>ライト</sup>軽・エクスペディションと銘打つ企画で、軽!と称するからには、軽であるべきそれなりの条件があると思うんです。既知のルートである事、登頂の可能性がそれなりにある事、等、ところが今回の旅は、全然違う。遠い過ぎて、これがまずトラブルの元、と事に当然な。た訳です。まず、山が違う、標高が違う、

(その旅行社は、隣りのシャイギリ(5971m)をルパール・ピークと誤認してメンバーを公募していた。ほなほだ問題!)、おまけに山が難しすぎる。(帰国してから読むだへんリッヒゴッファーの本では、どうやら別のルートから登頂しているらしい。ルート選定の誤りだ。た可能性もある。でもどっから接近して、まああの山は難しそう!)全く、甘言に乗って大枚叩いてのこのこ連いて来た我が身の方にも腹が立ったけど、まるで誇大な告、あまりにも樂觀的な企画、あれでプロの仕事か、と、ここら辺はしっかり苦言を呈したい所だ。それでも、とにかく後にはひけぬ、とカンパれるだけにはカンパるう、と思っていたので殊勝にも。ところが、<sup>(70-リ-ター)</sup>O氏の「技術的に<sup>(3人)</sup>全員でアタックする事は無理だから、まず男性<sup>(3人)</sup>だけでアタックする。」との提案には、100歩譲っても承服できぬ。出発してからはお互いの力量の分からぬ寄せ集めのパーティの中で、体調を崩さないように注意したり、誰よりもしつかり歩こうと努力したり、装備もがんばって自力で担ぎあげてきた事に、正当な評価を与えられないとしたら、憤慨するのは私ばかりではありますまい。O氏にはO氏の考えがあり、私は私でしつかり自己弁護してしまふ事になるのかもしれない。まさしくトラブルと称すべき話し合いの末、私は、体調の思わしくないT氏に替わり、アタックメンバーに組み入れてもらいました。自分の中にこんなにも激しい登頂欲があったという事に、我が身の事ながらビックリしてしまいました。

さあ、B.C.で下痢をしたりで今一つだったT氏は、C.(4300m)にて、朝テントから出ようとして倒れたきり寝たきりの人になってしまいました。当然アタックは中止、彼の救出に全力を注がざるを得なくなりました。ところがこれがとにかく大変。ちっと太めだったかもしれないT氏は、体の自由が全くきかなくなっており、ずた袋をひきずるような重さ。シュラフに入れ、<sup>(6人(メンバー+ポーター))</sup>全員で運んでも、7ンピッチで2,3mしか進めなかったり、急なカレ場のトラバースに足を踏むはずして私の方がシュラフにしがみつくと時々、…これで本当にB.C.まで辿り着けるのだろうか!この搬出に関しても、いろんな事があったのですが長くならないので省略します。とにかく、彼は生きてきたままB.C.に降ろされ、オンカを登っていた福岡登山会のドクターの治療を受け、劇的回復を遂げる事ができたのです。ドクターがもし居なかったら、…ゾーッ!皆さん、高山病、本当に恐いですよ。T氏は、回復してからも、中枢神経系の障害が残り、バランス感覚が戻らない、反応が遅い、考える事ができない、倒れる前

後3日ほどの記憶がない、等々ありとでも不安そうにしておりましたが、帰国してから完治したとの事です。そして、再び高峰に向かうべく第一歩からのトレーニングを開始したそうです。

さらにトラブル中のトラブルは、この遭難されぎの最中にハイポーターが財布を盗んだという嫌疑をかけられ、皆の目前で身体検査をさせられるという破廉恥極まりないもの。確かにパキスタンの人々々々ずいぶん違う所あるけれど、こんな事が許されるのは万国共通の倫理、でもんだと思う。ただ、差別意識が優先すれば何を言ってもむだだけど。結局、財布は出さなくて、私はこの事にどんな決着がついたのか知らないけれども、翌朝、ハイポーターはもう笑っていた。使われる身の悲しさ、媚びて歌を歌っていた。彼には彼の採算があつてや、やっている事なんでしょう。責められないけれど、奥に不愉快。身体検査を実施した側(ジャパニー)は問題外、話にもならない。

その他、大小様々、行く先々で何かある、と感じの旅だったけれど、とにかくオンがほりっぱでした。昔読んだ「8000mの上と下」、あの本にはずいぶん煽られたけど、そのヘルマン・ゴールが一人辿った長い稜線も見えます。疑惑の人、メスナーが弟を見捨てたとか、そうじゃないとか、あの「オンが疑惑」の舞台になったのもこのルパールです。足許から突然4500m迫り上がっているこの大岩壁に威圧され排斥されれば、ゴールやメスナーのような超人でなくたって、単なる日本人のハイカーだって、熱く体ごと沸騰して、めくるめく世界に没入してしまふのでありましよう。ネイチャーショックとでも言うのかな、私なんかあたり前のように抱いている自然の秩序感というものにはパキスタンにはなく、もっと厳しく圧倒的で、かつ対極的な自然(高さと低さ、暑さと寒さ、豊饒と不毛)が、息使いも荒く我が身に迫ってくる、という感じが、とにかく新鮮でした。

それに、<sup>宗教</sup>の事とか食習慣とか、その他もろもろ、生きてる事のその生き方が、自分がかんじがらめにされているお仕着せの日本流とは、かなり趣きを異にしているのも、何となく小気味良いものです。とにかく、人生のバリエーションはいくらでもあるものです。とにかく、「山も巻む」し。かり気に入ってしまった、帰りはパキスタンの民族衣装を買って恥ずかしくも着て帰ってきた、という私なのであります。(地上をお乗りいい気になつて闊歩するでない。別にお前に大地を裂くほどの力があるわけでもなし、高い山々の頂まで登れるわけでもあるまい。——コーランより——)